

震災翌日から指揮を執った。「スピードを重視し、現場主義に徹した」と振り返る。県内に住むう者の不安を確認が最優先。未曾有の災害に対する信頼感を高めた。

## 再生 せんだい

## ひと模様

1

## 宮城県ろうあ協会会長

小泉 正寿さん(63)

小宗さんたちが関係機関に派遣を求める

A medium shot of a man from the waist up. He is wearing a light-colored, long-sleeved sweater over a plaid shirt. He is smiling and pointing his right index finger directly at the viewer. The background is slightly blurred, showing what appears to be an indoor setting with shelves and possibly some artwork or documents on the wall.

**スピード重視**

東日本大震災で、耳が不自由なう者に防災無線は聞こえず、命と安全を守る情報が十分届かなかつた。避難生活のコミュニケーションでも不安と不便を強いられた。自身もろう者の宮城県ろう友協会会長小泉正寿さん(63)は「名取市」は「情報格差」解消を掲げ、ろう者を支える体制づくりに奔走する。手話を言語として広める「心のバリアフリーア」も訴える。

ライフラインが止まつた  
上、個人情報の壁もあつて確  
認作業は難航した。困つたら  
現場に足を運んだ。本部の連  
絡先などを書いた紙を掲げ、  
沿岸部の避難所を巡り歩い  
た。

見舞われ、命に関わる情報が得られなかつたり、意思の疎通がままならなかつたりする

の教訓もあって調整は円滑に進み、全国から人材を確保できた。県内の市町村に対し手話通訳者の重要性を示す「生きた啓癡」にもなった。  
その後も、自動車整備の事の帰りや休日には救援本

に足しげく通い、課題解決に力を尽しました。「自分たちがやらずに誰がやるんだ」という思いだった

う。震災9ヶ月後の2011年12月、脳梗塞で倒れてしまふ。右半身の自由がきかず、入院生活は半年に及んだ。

それでも屈しない。入院中はもちろん、退院後もリハビリに精を出し、両手で車を運転できるまで同じく、覚障害者情報報報があつた。まことに足しげく通い、課題解決に力を尽しました。「自分たちがやらずに誰がやるんだ」という思いだった

## 災害時孤立味わわせぬ

「**ろう者の「情報格差」解消へ奔走**」

アクセスで生活支援情報を探ししたり、「一般向けの出前講座を開いたりしている。小泉さんたちの努力が実を結んだ。」「生存から生活へと支援が移る中、ろう者が地域で安心して暮らすため、施設の使命は大きい」

の「十分機能させるためにも、多くの人に手話を覚えてほしい」と強調する。

## 手話を覚えて

「若い人たちの出番をもつと増やしたい」と先を見据える小泉さん 聰覚障害者らが交流を深め

手話で話すと掛けられるところがほぐれ、ぱっと明るくなる。「いつも思ひ。